

コロナ騒動で思う ～老・病・死は悪なのか～

バランスからだ塾 安田真行

2020年に入りすぐ中国武漢市で原因不明のウイルス性肺炎の患者が相次ぐとの報道があった。その後、そのウイルスは「新型コロナウイルス (SARS-CoV-2)」と名付けられ、欧米を中心に広がり、国内でも4月には全国で緊急事態宣言が発出されるに至った。5月中旬以降、順に緊急事態宣言は解除されたが、6月に入ると直ぐに東京都では「東京アラート」が宣言され、第二波ではないかとの報道が毎日飛び交い、再び緊張が走り始めていた頃の6月17日。朝日新聞朝刊に掲載された分子生物学者・福岡伸一氏の寄稿に目が止まった。「私は、ウイルスを、AIやデータサイエンスで、つまりもっとも端的なロゴスによって、アンダー・コントロールに置こうとするすべての試みに反対する。(中略)レジスタンス・イズ・フュータル(無駄な抵抗はやめよう)といおう」。数か月にも渡り戦々恐々としている中でのこの発言、他力本願であり実に痛快さを感じた。

また、緊急事態宣言中以上に「感染者数」が激増した7月には、動画投稿サイトYouTubeにあげられた徳島大学名誉教授で免疫生物学が専門の大橋真氏の解説に非常に納得がいった。彼の意見を大雑把にまとめるとこうだ。「WHOデータベースに登録された新型コロナウイルスの遺伝子配列データそのものは誰も検証しておらず、信憑性に欠ける。PCR検査は、そもそも開発者(キャリー・マリス 1993年ノーベル化学賞受賞)が「PCRを感染症にもちいてはならない」と言っているのだ。違うウイルスやすでに感染能力を失ったウイルスでも陽性がでる。これまでの風の判断でもPCRを用いることはなかったのに、今回世界中で判断基準にPCR検査を用いているには何か特別な理由があるのではないかと。

さらに、国立感染症研究所やCDC(アメリカ疾病予防管理センター)などで研究された国立病院機構仙台医療センターの西村秀一ウイルスセンター長も朝日新聞の取材に以下のような趣旨のことを述べている。亡くなった方からはウイルスは放出しないのに遺族の方には会わず火葬したり、学校で机を毎日消毒したり、スーパーのレジの方がフェイスシールドを強要されたりするのはまったく意味をなさないからやめるように宮城県に提案したと。

ここに挙げた意見はほんの一例に過ぎないが、それでもスポンサーに配慮してか、国内のTV局ではこのような類の意見は全くもって紹介されず、かの朝日新聞に掲載されたとしても、ほとんど民意には反映されていない。いや、ひょっとすると「なるほど、同感だ」と思っても、このように作り上げられた他言しにくい雰囲気躊躇して、口を閉じているのかもしれない。

これらを踏まえて考えると、SNSやYouTubeの方がなんの付度もなく、各々がそれぞれの意見を主張し易く、他では聞けない面白い意見を目にする。もちろん、玉石混交である事は忘れてはいけない。

今回の騒動は対ウイルスであるが、もしこれが対他国家、他民族だとしたらどうなっていたのか？今回と同じようにして民意を作り上げ、戦争へと向かって行ってしまったのか。いや、さすがにそこまでは愚かではないと信じたい。たとえ政府がそのように舵を切っても、今の日本国民は必至で反対するであろう。そう願っている。

では、なぜ今回の新型コロナウイルスに関してはこれほどまで簡単に、ほとんどの国民は自らの頭で考え、自らの体で感じ、自ら行動するというのを放棄し、真偽を問わない垂れ流しの報道に言いなりになってしまったのだろうか。

それはひとえに「死への恐怖」であると考え。ニュースや情報番組で「最悪の事態」という表現をする時は暗に「死」を意味することは自明の事だが、本当に「死」＝「悪」なのか？たしかに不本意な形で死を迎えざるを得なかった方やご遺族の方には心から同情する。私も長年お付き合いさせて頂いた整体の患者さんが亡くなったと報告を受けた時には、文字通り膝から崩れ落ちた事もある。悲しいし、寂しいし、辛いし、悔しい。しかしながら、「死」は「悪」ではない。

養老孟司氏が戦後のライフタイムは死や糞尿など目にしたくないものを家の中から遠ざけたと述べていたが、高度経済成長期以降、我々はまさにそれらを悪者扱いし追放してきたのだ。汚いものには蓋をし、水に流し、村八分よろしく「病」や「老」そして「死」を日常から家から追いやったのだ。追いやったおかげで綺麗になったつもりでいるが、そのおかげで肥料にもなる糞尿はおろか泥さえも触れない、過度に綺麗好きな子供が出来上がった。「老」を恐れては、やれマイナス5歳肌やらアンチエイジングたら、若作りに心血を注ぎ、「病」を恐れては早期発見、早期治療といった文言に踊らされ、いそいそと定期健診やら、人間ドックやらに通う過度に健康を願う大人が出来上がった。そのうえで「死」と言ったらそれはもう極悪としか思えなくなってしまうのは当然か。

しかし、逆に考えて欲しい。死なない方が怖くないかと。人間、どこまで欲が深いのか。その分恐れも深くなる。心身が健康である事は本当に有り難い事だということは百も承知だが、程々ではだめなのか。当方で主宰している「バランスからだ塾」では「バランス」は「ちょうどいい感じ」と定義している。幼児から小学生の子供たちに理論や道徳ではなく自らの体を通して、社会に生きる人間として、また生物としてのヒトとしての「ちょうどいい感じ」を一緒に味わえる場を目指して活動している。「吾唯知足」本来の自然はすでに「ちょうどいい」。足りないものは何もないことに気づこう。

今回の感染症は、かつてのペストやコレラのように、老若男女構わず高確率で死に至らし

めるわけではない。たとえ死に至ったとしてもそれは「最悪」ではない。お釈迦様だって「生老病死」を「四苦」とされたが、「四悪」とは言っていない。「生老病死」は地続きだ。「春夏秋冬」となんら変わりはない。今回のコロナ騒動が、老・病・死を過度に恐れ忌み嫌ってきた現代人にとって、死生観を見直すいい機会になることを願う。